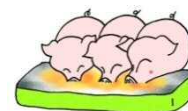


豚の疾病対策を見直してみよう

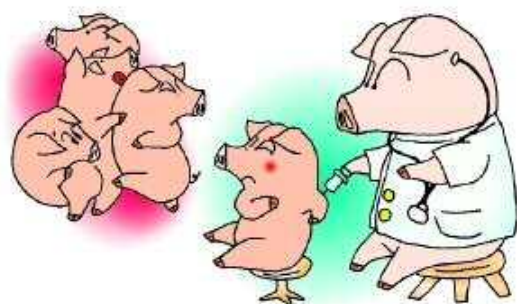


11月に入り、一段と寒くなってきました。季節の変わり目で1日の気温差が大きくなり、豚の調子が崩れてしまうことがあると思いますが、ちょっとした下痢や呼吸器症状などを「いつものこと」と見逃してしまっていないか？

豚の不調の原因には、感染症や環境要因など複数の要因が考えられます。なかでも呼吸器病や消化器病は、複数の病原体が複合感染していることが多々あります。農場内に存在している病原体は各農場によって異なりますから、農場内でどの病原体が動いているのかを把握し、対策を立ててみましょう。

1. 病気の原因を探る

対策を立てるためには、何の病原体が、どの発育ステージに潜んでいるかを知る必要があります。家畜保健衛生所では、病性鑑定（有料）により原因を突き止めるお手伝いをしています。検査項目は以下のとおりですが、下痢や死亡の原因を突き止めたい場合は、総合病性鑑定をおすすめします。



<病性鑑定検査項目>

- ・病理解剖
- ・病理組織学的検査
- ・細菌学的検査
- ・ウイルス血清検査
- ・ウイルス抗原検査
- ・遺伝子学的検査
- ・寄生虫検査
- ・総合病性鑑定

2. 投薬プログラムの見直し

予防や治療を目的として投薬を行いますが、何年も同じ薬剤を使用していたりしませんか？細菌によって程度に差はありますが、同じ薬剤を投与し続けることで、細菌が耐性を獲得してしまい、薬効がなくなっていることがあります。

細菌学的検査により原因菌を特定後、薬剤感受性を調べることができますので、病性鑑定結果を活用して、より効果のある薬剤を選択しましょう。

3. ワクチネーションの見直し

ワクチンを接種しているにもかかわらず、ターゲットの病原体が悪さをしたり、抗体価が上がっていない場合は、ワクチンの接種時期や接種量及び接種部位を誤っている可能性があります。例えば、豚の呼吸器病の原因となるサーコウイルスやマイコプラズマ等のコントロールがうまくいっていない場合は、複合感染の原因となります。ワクチンの効果を十分に得るためには、接種方法の改善が必要です。

疾病対策をおろそかにすると、発育の遅延や事故率の増加、と畜場での廃棄処分等により、経営に多大な影響を及ぼす恐れがあります。病性鑑定を利用して原因を探り、対策の仕方を見直してみてもはいかがでしょうか。

